

遣新羅使歌の日記文学性

森

斌

はじめに

万葉集の巻十五は、大きく二つの歌群から成る。一つが中臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌であり、一つが天平八年の遣新羅使の歌群である。岩波古典文学大系の解説では、「此の巻には、部類が施されていない。その点、今までの巻々と相違し、巻十七以下の四巻と似ている。しかし、巻十七以下のように詠作の年月日を詳細に記すことはしない」と指摘する。⁽¹⁾ここには、具体的に日記文学との関連を述べているのではないが、巻十七以下の四巻が家持の歌日記と呼称されていることを配慮する時、おのずと日記文学的性格を漠然としたものにせよ認めているのであろう。この大系の指摘以前には、久松潜一氏が家持の歌日記と遣新羅使の歌群を日記文学の起源としている。⁽²⁾また、家持

の歌日記でも巻十七に収録されている天平十九年の歌（三九六二番～四〇一五番）⁽³⁾は、玉井幸助氏が最も日記という形態を示しているとする。この箇所は、日付の記載が形式として日次の日記に近いのであるが、大伴家持と大伴池主との贈答歌が中核を占めて構成されている。玉井氏は、日記文学の本質を「実記」にあるとする立場から、形態の特徴としてこの家持の歌を中心にした日記として理解されている。嘗て家持の歌日記の日記文学性については考察したことがあり、そこでは、持続的に描かれた心情と自己を内省して得られる自照性を指摘した。⁽⁴⁾

さて、遣新羅使の歌は、出発を目前とした悲別贈答歌十一首に始まり、半年余りの旅行中に所に当りて誦詠した古歌十二首、さらに寄港地の娘子の歌三首を含むものであり、総数百四十五首が記録されている。続日本記によれば、

天平八年二月二十八日に阿部継麻呂が遣新羅大使に任命されている。さらに四月十七日に大使は拝朝しているが、万葉集の目録では六月に出発したようである。帰国は天平九年の正月に大判官壬生宇太麻呂、少判官大藏麻呂等、そして三月に入って副使大伴三中等が拝朝している。大使阿倍継麻呂は、帰路の対馬で死去していた。また、遣新羅使の一行はかなりの病死者を伴うものであつて、さらに新羅の日本に対する冷淡な外交により、惨めな旅行に終始したようである。それは、往路がほとんどであり、帰路の歌が僅か五首しか記録されていないことにもつながるのであるうか。

この考察では、日記という概念が平安時代の私家集をも含むものであり、かなり現代のそれとは異なる内容もある。即ち、日記とはその根本である実記の意味と時間の推移にそつて構成されていることの二点を配慮しなければならぬ。その立場からは、遣新羅使の歌と日記文学との比較が試みられて良いことになる。

一、形態について

新羅使の歌は、全体が一四五首であるが、題詞と左注に注目したとき近藤健史氏も既に試みられているが、二六の

歌群に小分類することが出来る⁽⁵⁾。さらに伊藤博氏は出発、西征、帰路ということから三類に分けている⁽⁶⁾。この三類に分けるのは、吉井巖氏も同様であるが、「題詞を押し立てて経て行く土地を提示する」ということから、次に示す(六)までを第一、(七)以降を第二、そして(二六)を第三としている⁽⁷⁾。そこでそれらの方法をも参考にして、まず序文を示し、その後一群から二六群までを、さらに左注と題詞、そして帰国後ということから三類に分けてこの論では示す。

新羅に遣はさへし使人らの、別を悲しびて贈答し、また海路にして情を働ましめ思を陳べたる、并せて所に当りて誦へる古歌

I 別れの歌

- (一) 右の十一首は、贈答(三五七八―八八)
- (二) 右の一首は、秦間満(三五八九)
- (三) 右の一首は、しましく私の家に還りて思ひを陳べたり。(三五九〇)
- (四) 右の三首は、臨発たむとせし時に作れる歌(三五九一―九三)
- (五) 右の八首は、船に乗りて海に入り路の上にして作れる歌(三五九四―〇一)

II 往路の羈旅歌

- (六) 所に當りて誦詠せる古歌(三六〇二―一)
 (七) 備後国の水調郡の長井の浦に船泊せし夜に作れる歌三首(三六一二―一四)
 (八) 風速の浦に船泊せし夜に作れる歌二首(三六一五―一六)
 (九) 安芸国の長門の島にして磯辺に船泊して作れる歌五首(三六一七―二二)
 (十) 長門の浦より船出する夜に、月の光を仰ぎ観て作れる歌三首(三六二二―二四)
 (十一) 古き挽歌一首并せて短歌(三六二五―二六)
 (十二) 物に属きて思ひを發せる歌一首并せて短歌(三六二七―二九)
 (十三) 周防国の玖珂郡の麻里布の浦を行きし時に作れる歌八首(三六三〇―三七)
 (十四) 大島の鳴門を過ぎて再宿を経し後に、追ひて作れる歌二首(三六三八―三九)
 (十五) 熊毛の浦に船泊せし夜に作れる歌四首(三六四〇―四三)
 (十六) 佐婆の海中にして、忽ちに逆風に遭ひ、漲浪に漂流せり。経宿せし後に、幸に順風を得て、豊前国の下毛郡の分間の浦に到着す。ここに追ひて艱難を怛み、悽惻みて作れる歌八首(三六四四―五一)
 (十七) 筑紫の館に至りて遙かに本郷を望みて、悽愴みて作れる歌四首(三六五二―五五)
 (十八) 七夕に天漢を仰ぎ観て各所思を陳べて作れる歌三首(三六五六―五八)
 (十九) 海辺にして月を望みて作れる歌九首(三六五九―六七)
 (二十) 筑前国の志麻郡の韓亭に到りて、船泊して三日を経たり。時に夜の月の光皎々として流照す。奄ちにこの華に對し旅情悽愴し、各心緒を陳べて聊かに裁れる歌六首(三六六八―七三)
 (二十一) 引津の亭に船泊して作れる歌七首(三六七四―八〇)
 (二十二) 肥前国の松浦郡の狛島の亭に船泊せし夜に、遙かに海の浪を望み、各旅の心を勵しめて作れる歌七首(三六八一―八七)
 (二十三) 杵岐島に至りて、雪連宅満の忽ちに鬼病に遇ひて死去りし時に作れる歌一首并せて短歌(三六八八―九六)

(二四) 対馬の島の浅茅の浦に到りて船泊せし時に、順

風を得ず、経停すること五箇日なり。ここに物
華を瞻望し、各働める心を陳べて作れる歌三首
(三六九七～九九)

(二五) 竹敷の浦にて船泊せし時に、各心緒を陳べて作
れる歌十八首(三七〇〇～一七)

III 帰路の歌

(二六) 筑紫を廻り来りて、海路より京に入らむとし、
播磨国の家島に到りし時に作れる歌五首(三七
一八～二二)

資料として見ていく時に大事なものは、本格的に羁旅歌
であることを意識して、そして歌の場を示して記録しよ
うと試みているのは、(七)の歌群からである。そこでは
まず題詞に国、郡、浦の名前等が記されていて、この題
詞形式が基本的に帰国後の歌群(二六)まで踏襲されてい
る。また、I群とII群の違いは、I群がそれぞれ左注で
纏められることに対して、II群は題詞でうたわれる場を
尊重されて分類されたことである。しかも、遣新羅使の
歌は、時間と空間的な場とを配慮して配列されているの
であるが、一方歌の主題と形式ということからは、次の
ごとく整理できる。

悲別贈答歌十一首

古歌誦詠十二首

七夕歌三首

挽歌九首

寄港地の娘子の歌三首

妻や家人を思う歌四十五首

旅中の風物及び旅愁をうたう歌六十二首

この整理から判断されるように、歌群の中核は京に残し
てきた妻であり、家の人であり、また旅の徒然に心を慰め、
また旅愁に悩む心情である。遣新羅使に選ばれたが故に、
長期にわたる船旅を経験してよまれた歌が主なるものであ
るが、古歌を誦詠することにもこの新羅に遣わされる旅と
の関連が求められるべきである。阿蘇瑞枝氏は、「古歌を
誦詠することによって一行の中に徐々に歌を作ろうという
雰囲気、恋の歌を作ろう、旅の歌を作ろうというような雰
囲気が高まっていった」と考えている⁽⁸⁾。但し、古歌の誦詠
(六)が記録される前に詠まれた船出してからの歌(五)
の八首中には、「武庫の浦」(三五九五)「印南」(三五九六)
「玉の浦」(三五九八)「神島」(三五九九)が歌枕であり、
「室の木」(三六〇〇、〇一)が同伴旅人の歌を背景に持つ
歌である。土佐日記などでも歌枕とか、著名な歌人に結び

つく時に和歌を創作しているので、阿蘇氏の指摘は当然のことである。歌枕や古歌に登場する表現を連想する場所等では、等閑に出来ない詩心が沸き起こるのであろう。

古歌は、二ヶ所に記載されていて（六）と（十一）である。（六）は恋の歌と柿本人麻呂の作であり、（十一）の古い挽歌とは亡き妻を悼むものである。さらに（七）以降の歌群については、歌の場としての備後、安芸、周防、筑前、肥前、壹岐、対馬、そして帰国途次の瀬戸内海東征中の播磨の国についてそれぞれ記載漏れがない。資料としても、

（六）の古歌の誦詠後は、歌の詠まれた場を尊重して、しかも詠まれた国をはっきり明示した歌群として纏められている。地名を歌の場の背景に記録しようと意図が明確に示されていて、この基本形式は帰国後に詠まれた最後の歌まで守られる。遣新羅使の歌は、旅程の順番に則り構成されている。そして、旅が進むに従って、使人の心も変化していくであろうが、しかし歌を作る主なる要因は変わることがない。京に残してきた妹・家人、そして旅の徒然である。そして、歌の場として地名を正しく記録することは、紀行文学の原則でもあった。国内の帰路中に歌が僅か五首であっても記録されているのが、そこに何らかの完結を求めたのかもしれない。新羅滞在中の詠歌も記されている。

ないので、歌はその期間ほとんど作らなかったのかもしれない。

旅といわれているもので往復を記すものは、上代では以外に多い。むしろ、往路か帰路か何方かを記録する場合は日記紀行文学では多いのであるが、万葉集以前の記録ということになれば往復を記している。まず古事記・日本書紀ということになるが、旅的な要素を含む説話ということでは、倭建の東征と西征、神功皇后の三韓征伐ということになる。どちらも往復を記している。また、鑑真的伝記である東征伝では唐から日本にわたるための記録であるから、日本への渡航ということになるが、計画も含め六回の渡日の旅が記録されている。さらに、円仁の入唐求法巡礼行記、円珍の行歴抄なども当然日本から唐に渡る記録であるが、在唐の記述からみて僅かの記録であっても帰国までも含む帰路のみ往路のみ、はたまた往復の旅を記すことは、形態としては三様があったといわなければならない。しかし、見聞を記録するというだけではなく、そこに紀行文学としての完成を意図しているのであれば、当然作者の判断が大きく作用する。土佐日記などは、まさしく帰任の五十五日の記録に基づき、さらに虚構を取り入れて創作されているという。⁽⁹⁾遣新羅使歌も単なる歌の記録を意図していないこ

とは、それぞれの歌群の構成にも反映されているのであるが、まず贈答十一首が契機となり、全体的な意図も配慮されているのである。そして、それは、たった五首でも帰路の歌を添えることで全体が纏められたことと結びつく。吉井巖氏は、冗漫を避けた有効な構成と評価して、「この歌群はこの姿で完結」しているとした。⁽¹⁰⁾ このことは、個々の羈旅歌の集合体としてだけではなく、紀行文学として捉えていくための第一の条件である。

一、持続的な心情

伊藤博氏は、第一部冒頭十一首が第二部往路対馬浅茅湾迄の詠一二四首、第三部播磨家島に帰り着いての五首に響き合うように構成されている、と説明する。⁽¹¹⁾ 苦しい旅であつても秋には妻との再会を果たすと言う心情がその中核であるとする。この指摘は、構成と主題の問題を解決したのであるが、そこには日記文学で言うところの実記に近い持続的な心情の吐露が見られるのではあるまいか。そこで巻頭である(一)の贈答十一首を取り上げたい。

- (a) 武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし (三五八七)
- (b) 大船に妹乗るものにあらませば羽ぐくみ持ちて行か

ましものを (三五七九)

- (c) 君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ (三五八〇)

- (d) 秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ (三五八一)

- (e) 大船を荒海に出します君障むことなく早帰りませ (三五八二)

- (f) 真幸くて妹が斎はば沖つ波千重に立つとも障りあらめやも (三五八三)

- (g) 別れなばうら悲しけむ吾が衣下にを着ませ直に逢ふまでに (三五八四)

- (h) 吾妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐を吾解かめやも (三五八五)

- (i) わが故に思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ (三五八六)

- (j) 栲衾新羅へいます君が目を今日か明日かと斎ひて待たむ (三五八七)

- (k) はろはろに思はゆるかも然れども異しき心を吾が思はなくに (三五八八)

- これらの贈答は、(a)が(b)と、(c)が(d)と、(e)が(f)と、(g)が(h)とそれぞれ対応しているのであり、(i)(j)(k)の三首が未解

決の問題を残している。しかし、これらの歌でまず注目されるのは遣新羅使が秋には帰国していると予想していることである。(d)の「秋さらば相見むものを」と言っているが、このことは(十二)の歌群に属しながら、地名に安芸の国というより播磨の国にある地名「家島」と吉備の国にある地名「玉の浦」とがうたわれた長歌の反歌に、

秋さらばわが船泊てむ忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波
(三六二九)

とある。また、筑紫の館で詠んだ歌には「今よりは秋づきぬらし」(三六五五)と秋を確認して、さらに七夕に素材として詠む歌の後でも、

秋風は日にけに吹きぬ吾妹子は何時とかわれを斎ひて
待つらむ(三六五九)

と博多の海辺でうたい、既に晩秋九月に入っていた対馬の浅茅の浦でも

竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ来に
ける(三七〇一)

黄葉は今はいつろふ吾妹子が待たむといひし時の経ゆ
けば(三七一三)

と、秋には再会するという心情を持続してうたっている。さらに帰国後に詠んだ五首中にも、この主題は繰り返さ

れている。

草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく
(三七一九)

六月に出帆しても帰国が秋になるということは、国司の赴任について規定している延喜式などを参考にして旅程を配慮した時、都から筑紫まで船旅が一カ月ほどであり、強ち無謀な計画とは言えない。阿蘇瑞枝氏が遣新羅使の旅程を調べられているが、最短の旅では、三カ月で往復している、とする⁽¹²⁾。従って、六月出発して九月帰国という計画自体は、机上の空論にならないのであるが、しかし何事も理屈どおりにならない。そもそも(三二)の三五九〇番の左注には、「しましく私の家に還りて」とあり、難波からの出発も思うように実行されていないようである。

さて、遣新羅使の歌の作者不明をどう考えるかは、論の別れるところであり、一人説と複数説に大別される。最新の成果に基づく詳しい説の紹介は、阿蘇瑞枝氏が試みられている⁽¹³⁾。作者が一人にせよ、複数にせよ、贈答十一首の最後にある(k)は、意味深い。

すなわち、この歌は上句で旅程の遙かなることを「はろはろに思はゆる」と言い、下句では「異しき心」を持たないと言う。この歌は、(j)と一対として男性作者の詠と理解

すると、贈る歌の女性が帰宅を今日か明日かと思いつつ「齋ひて待たむ」(三五八七)と歌うのであるから、少しく贈答としてずれがある。逢いたくて身を清めるのであるから、それは旅の安全のことであり、平穩であれ、幸いであれ、そして無事であれと祈るのであらう。とすれば、答歌で男性が浮気のことを指すと思われる「異しき心を吾が思はなくに」というのは、おかしい。

この歌は、明らかに独詠の趣である。この三五八八番は遣新羅使歌の最も根本をなす主題である。上句の望郷と下句の恋情で象徴的に示している。距離の隔たり、それがますます恋心を確認していくのであるが、この旅行中は羈旅歌と相聞歌とが主体をなすのであつて、直接妹が恋しいと詠んでいる歌が四十二首もある。

そもそも遣新羅使の歌といつても作者の知られるものと知られないものがある。全体が一四五首あるうち、誦詠した古歌十二首、妻の歌五首、娘子の歌三首を除いて、男性の作である記名の歌二十七首があり、作者の知られないやほり男性の歌が九十八首である。作者未詳の歌が全て同一の作家によって創作されているのであれば、万葉集中大伴家持、柿本人麻呂に次ぐ第三位の歌数を誇ることになるが、そこまで判断しなくてもある特定の個人の歌と判断したく

なる内容に満ちている。さらにここに至れば、有名な巻十九にある左注を思い浮かぶ。

悽惻の意は歌にあらずは撥ひ難し。仍りてこの歌を作り、式ちて締めし緒を展ぶ。ただこの巻の中に作者の名字を偁はず、ただ年月・所処・縁起のみ録せるは、皆大伴宿祢家持の裁作れる歌詞なり。(四二九二)

作者の名前を記さないのは、全てがある特定の人であるという注記なのであるが、これは家持の記録の立場である。遣新羅使の誰かが記録したものを、万葉の編纂者が再構成していたにせよ、作者については慎重な立場を守っている。僅か二七首しか名前が知られないのは、その立場からであるうが、ほとんどはある特定の人であつたのではないだろうか。

筑紫に廻り来りて海路より京に入らむとし、播磨国の家島に到りし時に作れる歌五首

家島は名にこそありけれ海原を吾が恋ひ来つる妹もあらなくに(三七一八)

草枕旅に久しくあらめやと妹に言ひしを年の経ぬらく(三七一九)

吾妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家つくらしも(三七二〇)

ぬばたまの夜明しも船は漕ぎ行かな御津の浜松待ち恋
ひぬらむ（三七二一）

大伴の御津の泊に船泊てて龍田の山を何時か越え行か
む（三七三二）

引用した五首の構成は、題詞にある家島に到着しての感慨を第一首、第二首の歌で表現して、さらに家島より先の淡路島に思いを馳せた第三首、さらに淡路の先の御津、そしてさらに難波から大和に心を馳せて龍田山をそれぞれ第四首、五首でうたう。これは現在から近い将来までを予想して連作している姿である。そこには、贈答十一首から営々と試みられた望郷と恋情の主題を根底にしながら、時間と空間の推移を予想して歌作している。秋に帰京するという妹との約束事も「妹に言ひし年の経ぬらく」（三七一九）とうたい、冒頭と巻末との対応をさせている。首尾を一貫させているとともに、遣新羅使の歌は、まさしく六カ月間の心情を示す蜻蛉日記にある「身のうえのみする日記」なのである。官人としての使命感、抱負といった表の顔は見せないで、日常的な褻の世界である家族、とりわけ妹との離別、恋情、望郷を、帰国予定を秋に設定して繰り返し繰り返し歌うのである。そして、それは作者未詳の歌群の主題なのであり、作者の知られる歌もそれに正しく対

応を見せている。

ここで日記文学を参考にした時、歌がある主題に添うことで連続的にうたわれてしまったがために、逆説的にさまざまな創作の機会が無くなっている、といわなければならぬ。例えば、病氣や怪我、船の日常生活における歎び、悲しみ、寄港地での出会い、風土の違い等、紀行には多面的な創作の場があったはずであるが、新羅使は語ることもうたうこともしない。その意味では、紀行文学の多面的な内容を、新羅使の歌は示していないことになる。

三、事実の強調

繰り返し主題がうたわれるのは、歌を単純に時間的に記録しているというよりも、構成を十分に配慮している作品であることを判断する根拠にもなり得るが、もう一つ主題以外の歌を遣新羅使が詠まなかったか、それとも歌う機会があっても特別の場合を除き記載しなかったとも考えられる。

往路の最後の歌は、対馬竹敷の浦で詠まれた十八首である。十八首の構成は、大使阿部継麻呂、副使大伴三中、大判官、小判官、対馬娘子という作者の順序で始まる。まず大使の歌は、

あしひきの山下光る黄葉の散りの乱ひは今日にもある
かも (三七〇〇)

とあり、宴席の挨拶が示された。

続いて副使が、大使の歌にある山裾を照り輝かせて散り
乱れる黄葉の感慨が妹と約束した秋に帰国できないことに
由来しているとして、

竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ来に
ける (三七〇一)

という理解を示している。

散り始めた黄葉に対して、さらに大判官と小判官とは、
竹敷の浦廻の黄葉われ行きて帰り来るまで散りこすな
ゆめ (三七〇二)

竹敷の宇敷可多山は紅の八しほの色になりけるかも
(三七〇三)

と、新羅から帰るまで黄葉が散らないことを祈り、また散
りつつ紅葉することを「八しほの色」に染まると理解を示
している。

この歌に続くのは、竹敷の遊女とおぼしき名を玉槻の歌
二首である。

黄葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ船のほひに愛でて出でて来
にけり (三七〇四)

竹敷の玉藻靡かし漕ぎ出なむ君が御船を何時とか待た
む (三七〇五)

玉槻の二首について、原田貞義氏は美的な対象としての
み黄葉をうたい、遣新羅使の約束事である秋に帰国する
という背景が見られないとして、歌の質の相違に触れている。⁽¹⁴⁾
まさしくこの娘子のうたう黄葉は、妹との約束である秋と
結びつくものではなく、賞美する対象である。そして、秋
には帰国するという一行の希望を知らないのであるから、
玉槻はその美しい黄葉を讀えて船がやってきたという。遣
新羅使の歌にある黄葉とは同一に捉えられないし、その意
味での外れた内容といえる。しかし、宴の挨拶としては、
十分に意を尽くすものであるから、大使は三七〇五番に、
副使は三七〇四番にそれぞれ唱和する。

玉敷ける清き渚を潮満てば飽かずわれ行く帰るさに見
ゆ (三七〇六)

秋山の黄葉を挿頭しわが居れば浦潮満ち来いまだ飽か
なく (三七〇七)

大使は、玉槻の歌にある「君が御船を何時とか待たむ」
(三七〇五)に挨拶して「帰るさに見ゆ」といい、これま
での歌と趣を異にしている。また、妹との約束である秋と
言う季節を三七〇一番で確認している副使ですら、ここで

は黄葉は既に簪という賞美の対象になっている。しかも、ここでは玉槻の歌に大使、副使の見事な対応が試みられている。

この宴席は、大使の歌に始まり、大使の歌で実質的に終えている。大使最後の歌は、次の如くに詠まれている。

物思ふと人には見えじ下紐の下ゆ恋ふるに月そ経にける
(三七〇八)

そしてこの後は、作者について触れない歌が九首連続している。竹敷での半分は、作者未詳なのであるが、ここでは歌で家郷を偲び、また黄葉も二首に詠まれる。再び黄葉も賞美の対象ではなく、物思わざるを得ない秋と重なる内容に戻っている。このことは、大切な示唆を与えるものではないか。即ち、大使、副使、大判官、小判官をはじめとする使人は、歌を作る暗黙の約束のようなものがあつたのではないだろうか。

黄葉は今ほうつろふ吾妹子が待たむといひし時の経ゆれば
(三七一一)

天雲のためたひ来れば九月の黄葉の山もうつろひにけり
(三七一六)

このような風雅な宴席での大使、副使等の歌も、贈答十一首に繋がる世界の繰返しである。隅々玉槻のような遊女

が雅びに繋がる黄葉に歌を発展させても、やはり体制は望郷と恋情に主題が戻ってしまう。一時は大使なども玉藻を靡かせて新羅に向う船出の渚を帰りに再び見たいと三七〇六番でいいながら、酒宴の最後に望郷を吐露し、秋九月になつてしまったことを「下紐の下ゆ恋ふる月そ経にける」(三七〇八)と言うのである。

この歌に対する共通認識、つまり望郷と恋情という主題は、終始遣新羅使に守られてるのである。とりわけ作者不明歌には何ら憚る事無く連綿として繰返される。そもそものこの和歌自体が私事に関わることであり、遣新羅使としての使命感、責任感、抱負などは歌う対象にならなかったのである。

ここに日記文学を特徴づける虚構の問題が存在するのであるまいか。或いは歌と言うものが私情のみを対象にしているという時代になっているのかも知れないにせよ、新羅使の歌は徹頭徹尾身の上の問題を叙情として表現したのである。家に残した妹、妹との約束、故郷への慕情が歌の主な対象であり、船旅に素材しているが故に羈旅歌の性格も加味されることになった。題詞には、「夜」が六例、また「船舶」が九例ある。このことは、歌が宴席で披露されたことを物語る。とすれば、雅びな雰囲気が要求されたこと

を配慮して良いのであるまいか。遣新羅使以前の人物である大伴田主は「容姿佳艶しく風流秀絶」（一二六・左注）として、さらに「遊士」（二二七）と自称している。

従って、歌に使命感や抱負などが詠まれていないなどというのは、雅びな宴席などでは詠む対象にならないことがらであったと見做すべきである。彼らが本当に使命に燃えていなかった、責任感のない官人であったなどということは軽はずみに言えないのであるまいか。歌うことは、生活の全てであったわけではないし、むしろ日常生活からはある一面であろう。しかも、その歌の主題とする対象すら限定していたのが遣新羅使の歌なのである。伊藤博氏は、「心情的には『妹』を、時間的には『秋』をモチーフとする虚構体である」としている¹⁶。

しかし、ここでいう虚構とは、事実の強調で誕生したものである。それは、日記文学にも試みられて実現している性格のものである。即ち、実記的な内容に基づきながらある事実を強調することは、決して単純な強調になるのではなくて、そこにある種の虚構が生じることである。蜻蛉日記では、夫の兼家を必要悪に描くことになり、客観的な事実の姿と異なる事になっているし、土佐日記では主人が徹底して嫌った現国守の島田公鑑、またあの傲慢でや

り手の船頭なども事実の延長線上にあると単純に考えられない¹⁶。遣新羅使歌が主題に忠実であればあるほど家に残してきた妹、そして妹との約束、故郷への思慕が強調されるのであるが、しかしそれが彼らの旅の全てでないこともあまりにも自明であるし、また歌のみで使命感、責任感、仕事に対する抱負なども軽々しく言及できないのであるまいか。現実には、行く時、帰国する時の心情的溝もありえたであろうから、往路の歌に偏っているのは遣新羅使の期待と抱負の反映であったのかもしれない。それが新羅の外交の在り方から裏切られた時、帰路の極端に少ない歌作という事実になったのかも知れない。大伴家持も悲劇的な時代、或いは極端に心情が落ち込んでいた時は、創作していない。そして、この実記的なものに基づく強調から生まれる虚構は、むしろ意識しているというよりも、作者にとっては作り事と単純にいけない無意識のこともある。

遣新羅使歌にこれまでの研究で欠けていたのは、日記的な虚構性を認めることではあるまいか。この虚構性を認める時、そこには編纂者の意図もさらに読み取れるのである。歌とは悲しき玩具なのだと。そして、歌はあくまで悲しい心情の開放なのであって、志や抱負、単純な日常の反映ではありえないのである。家持の表現を借用すれば、「一た

び玉藻を見て、稍く鬱結を写き、二たび秀句を吟ひて、已に愁緒を鉤く」(巻十七 七言詩序)ことが遣新羅使の試みたことなのである。

四、日記文学として

日記文学は、自照の文学とも言われる。貫之が任国で喪った女兒を顧みて凝視した内省をいう。また、道綱の母は、兼家との結婚生活をやはり顧みて「あるかなきかの心地するかげろふの」と述べている。しかも貫之も道綱母も共に独りぼっちの心情に到っている。ひたすら孤独になって、己れの世界を形成している。こういう世界は、遣新羅使には見られない。そこには、旅愁、望郷、恋慕という主題が持続的に統一して描かれていても、けっして独りの世界を描いたわけではない。では、全く旅に素材して時間と空間の流れと移動だけで構成されているのであろうか。最近では虚構性が指摘されている。

伊藤博氏は、実録に基づきながら虚構的な歌物語に組み立てられた、と述べられた¹⁷⁾。和歌の理解から事実というものを帰納できると仮定しても、残された遣新羅使の歌は、ほとんどが夜の宴席でうたわれた風雅に基づくものであり、けっして今日的な意味で日常を反映した、或いは一般的な

生活そのものではない。例えば、三六四四番の題詞に、

佐婆の海中にして、忽ちに逆風に遭ひ浪浪に漂流せり。
経宿せし後に、幸に順風を得て、豊前国の下毛郡の分間の浦に到着す。ここに追ひて艱難を怛み、悵惆みて作れる歌八首

と記されながら、海難の直接描写は「忽ちに逆風に遭ひ浪浪に漂流せり」という箇所である。

大君の命恐み大船の行きのまにまに宿りするかも(三六四四)

浦廻より漕ぎ来し船を風速み沖つ御浦に宿りするかも

(三六四六)

鴨じもの浮寝をすれば蜷の腸か黒き髪に露そ置きける

(三六四九)

また、題詞に「艱難」「悵惆」とありながら、引用した「大船の行きのまにまに宿り」「風速み沖つ御浦に宿り」「鴨じもの浮寝」で漂流していたのだろうと知るのであるが、この三首の歌から、どこまで題詞にある様な海難による辛苦が理解できるのであろうか。題詞には後に辛かったことを嘆き悲しみ作ったとあっても、羈旅歌の伝統に止まる旅の辛さの表現である。題詞も表現として具体性に欠いていて、また同様に和歌の表現も、竹取り物語の相伴大納

言、土佐日記の海難の恐怖を散文で、或いは和歌と散文で描写していることと対照的に慎ましい。さらに寂しい鄙を旅していても、和歌表現の限界であらうか、遣新羅使の登場させる動物・昆虫も「ひぐらし」「鶴」「蟬」「魚」「雁」

「鹿」をうたいながら、それは伝統に則るものである。長江信之氏が遣新羅使が見る自然とは、いずれも美的なイメージによって彩られるものであり、「現実の自然そのものから引き出される自己の心情を歌おうとはしない」という批評を与えている。⁽¹⁸⁾遣新羅使歌が万葉の羈旅歌一般と同質であることは、阿蘇瑞枝氏も指摘している。⁽¹⁹⁾

しかし、ここで船旅に素材していると言うことから土佐日記と比較してみたい。土佐日記に見られ、遣新羅使の歌にも表現されているのは、まず瀬戸内海の航海では潮の干満による流が最大の障害になるであらうが、そのことが「韓国に 渡り行かむと 直向かふ 敏馬をさして 潮待ちて 水脈びき行けば」(三六二七)とある。次に障害となるものは風と浪と言うことが出来る。これは遣新羅使歌に頻繁であるが、恐ろしさの表現としては慎ましい。

一方、土佐日記に見られながら遣新羅使歌の素材や主題としてとりあげられていないのは、京師にいる妹と帰国

季節である秋がテーマになっていながら、直接船の進行について触れる歌がない。約束の九月までには帰国と考えていたのであるが、往路の対馬でその月になっていても船旅の遅延を嘆くことはなく、妹に逢えないことで間接的に恨み心を漂白しているに過ぎない。また、対馬では綱などで引き船した箇所もあったのではと思われるが、かかる記述もない。さらに船旅では病人も出るが、健康などを問題にした箇所がなく、挽歌のみが記録されている。さらに言わずもがなのこととしても、船上での舟人や役人等の生活を歌うことがない。また、京と鄙を比較して地方の特徴に触れることもない。その意味でも、遣新羅使の歌は、万葉集巻七にある羈旅歌に類似している。従って、歌は徹頭徹尾私に限定された抒情なのであって、せいぜい七夕に題材を得ているのが新鮮である。

遣新羅使の歌に登場している人も、海人、海人娘子、京の人、足媛(神功皇后)程度であり、偶々宴席にいる娘子が登場しているに過ぎない。総勢二百人程度と想像される人の船上における生活は見られない。また、歌に詠まれた風物にしても、また生きものにしても、万葉集の常識の範囲である。土佐日記の比較からいって興味深いのは、むしろ霧の歌である。

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（三五八〇）

わが故に妹嘆くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり

（三六一五）

沖つ風いたく吹きせば吾妹子が嘆きの霧に飽かましもの（三六一六）

瀬戸内海の航海では、風・浪・潮が障害であるが、霧も同様に障害になる。ところが、ここではむしろ妹の嘆きの息として捉えているところにこの旅の徒然を想像する独自性が見出される。

さて、類似した内容として、土佐日記にも海岸の松原をうたっているところがあるにせよ、相違した内容のほうがはるかに多いのも事実である。しかし、やはり土佐日記に代表される旅に素材した日記文学に発生的起源として認めたい。それは、まず第一に旅日記としての完結性が認められるからである。即ち、出発の贈答から、帰任の直前迄を歌に纏めているのは、巻頭の贈答と巻末の独詠が呼応するものであり、編纂者が遣新羅使の歌の構成に意図した結果なのである。全体が百四十五首で完結するように構成されているのであり、それが遣新羅使歌なのである。彼らの共通の思いがこの構成で完結しているのである。妹そして約束

の秋という繰り返しのテーマは、僅か五首に過ぎない帰路の歌でもって悲劇的に完結していた。

第二の根拠としては、虚構性の質にある。遣新羅使歌として完成させる努力は、虚構性の指摘に関わる。それは、基本的に事実に基づく旅程に則るのであるが、三五九八、三五九九、三六〇〇、三六〇一番等は、明らかに備前か備中玉の浦、備後鞆の浦で詠まれているなければならないのでありながら、播磨等の地名乎等女、藤江、明石、武庫の浦などを歌に詠み込んでいる人麻呂の伝承歌の配列前に挿入されている。或いは古き挽歌（三六二五）と物に属して思を發せる歌（三六二七）にしても、安芸の国長門島と周防国の麻里布の浦との間でうたわれたとは考えられない。そこには、ある主題のために再構成されている歌群であって、そこに羈旅歌から紀行文学への萌芽を認めたい。また、記録ということからは、入唐求法巡礼行記や、行歴抄にしても、単純に比較できないが、出発と帰国を省略することがない。その意味でも、わずかに五首にしても帰国途次に詠む歌を記録していることは漢文日記の羈旅文学の性格を示している。

一方女流日記文学との比較はどうであろうか。蜻蛉日記の母体になっているのは兼家と作者との贈答歌である。大

鏡・兼家に「この母君きはめたる歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどのこと、歌など書きあつめて、『かげろふ日記』と名づけて世にひろめ給へり」とある。ごくである。道綱の母は、兼家の求婚、夫との生活、独り息子の母としてという女性の生涯を、ある明確な主題に基づき書き上げている。それは、自叙伝ともいわれることも結びつくのであるが、兼家との経緯を記しながら、蜻蛉日記執筆が結婚生活に終止符が打たれた後と考えられるからでもある。しかし、和歌は、基本的にこの日記の根幹になっているために、叙述が作者の身辺に限定されるし、また描かれる内容もあくまで家庭のことである。倫寧は父として、兼家は夫として、それぞれ作者は書いている。この点は、遣新羅使の歌が私情を歌っていることと同一線上にある。即ち、遣新羅使は、歌で官人の立場を表現していない。大使、副使、大判官、小判官にしても、官人としての肩書の署名であるにせよ、歌に日常の藝ともいふべき抒情である。そして、和歌的表現としての類似と言うことでは、むしろ贈答歌によって話が展開していく構成になる箇所が蜻蛉日記に多く見られることである。例えば、天徳二年七月の道綱の母と兼家の贈答は、長歌二首（一二三句、八九句）、短歌五首からなる贈答により、作者の境遇への不満

と兼家の対応が描かれている。蜻蛉日記は、作者と兼家の贈答がその根本にあるのである。その意味では、遣新羅使も最初に置かれた贈答十一首がその後の歌の展開を決定付けていることの関わりを指摘出来る。ただ、蜻蛉日記は、女性が和歌的表現で試みた伝記になっているのであって、紀行文学的要因が例外的に試みられているに過ぎない。日記という形態、そして女流日記文学の本質に繋がる自照性や孤独な心情ということを持続的に描いていることでは、万葉集卷十七以下の家持の歌日記にその類似性を求めるべきである。

日記紀行文学は、例えば漢文日記の入唐求法巡礼行記のような記録性の強いものとか、或いは土佐日記に代表される虚構世界が絢爛に花咲いたものの二種類あるのであるが、遣新羅使は土佐日記に近い紀行文学として位置付けられてよい。それは、事実をありのままに書き記したものではなく、記録的な性格も含みつつ構成に、そしてその虚構性に、即ち紀行文学的な配慮と性格が見られるという意味である。

結　　び

遣新羅使の歌で作者の知られる歌は、一四五首中わずか

二七首である。しかし、作者の知られない歌がある特定の作家を想像されるのは、その構成にある。例えば、贈答十一首は、作者が知られない。しかも、そこで歌われた霧を女性の「吾が立ち嘆く息と知りませ」（三五八〇）というところが男性に「霧に立つべく嘆き」（三五八一）の理解としてうたわれ、さらに風速の浦で詠まれた無署名の作に、

我が故に妹嘆くらし風速の浦の沖辺に霧たなびけり

（三六一五）

沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧に飽かましもの（三六一六）

とある。従って、まったく作者が知られないからといっても集団のなかに埋没してしまうものではなく、むしろある特定の作家を連想することく持続した心情を吐露している。一方この問題は、作者の知られる歌とも関わる。この苦しい旅が秋には帰国の運びになるという予定は、大使の次男（三六五九）と副使（三七〇一）にもうたわれ、さらに作者不明の歌（三六二九、三七一三、三七一九等）の主題でもある。遣新羅使には主題の統一の試みに基づく歌をうたうという共通の理解もあつたらしいことが分かるのであつて、歌がけつして旅における今日的な日常などの反映ということではない。そして、事実はどうであれ旅程に基づく

歌の構成と中心人物らしき存在がある。

そこで日記文学と遣新羅使歌という問題であるが、文学の伝統としては土佐日記、漢文の東征伝や入唐求法巡礼行記等の成立に先立つ作品として、万葉集に遣新羅使歌一四五首が存在していることを認めてよい。それは、形態、持続的心情、実記の性格、事実の強調に基づく虚構性、そして歌枕を契機にした古歌の享受等が指摘できるからである。とりわけ土佐日記の多面的な性格を問題にしない時、日記紀行文学としての性格は、遣新羅使歌にも指摘できた。

それらの意味するところ、実記の意味と時間的配列、そして旅に素材しているのであるから、遣新羅使歌一四五首は、日記紀行文学なのである。

注

- （1）『万葉集四』各巻の解説 一六頁
- （2）『日本文学史（上）』日記文学の成立と和歌 一一七頁
- （3）『日記文学概説』第二章第一節 二七〇頁
- （4）『家持の歌日記』その日記文学性について——（『広島女学院大学国語国文学誌』八号）
- （5）『遣新羅使人歌とその場——長門の浦船出歌群の場合——』（『上代文学』第四三号）
- （6）『万葉の人格——遣新羅大使阿部継麻呂の歌——』（『万

葉」第二二八号)

(7) 『万葉集全注卷十五』万葉集卷十五概説 四頁

(8) 「万葉の旅——遣新羅使人歌を中心に——」(『国文学資料館講演集』一二号)

(9) 注7に同じ。二頁

(10) 萩谷朴氏は、『土佐日記全注釈』で土佐日記の構想と手法として「戯曲構成、脚色虚構、偽装臈化、女性仮託、諸諱効果、一貫照応、反復学習」という項目を設けられている。

(11) 注6に同じ。

(12) 注8に同じ。

(13) 「万葉後期の羈旅歌——遣新羅使人歌を中心に——」

(「高岡市万葉歴史館紀要」創刊号)

(14) 「今ひとたびの“秋”——万葉集編纂資料の一として見たる遣新羅使人の歌——」(『国語国文学研究』第六〇号)

(15) 『古代和歌史研究2』第七章第一節 万葉の歌物語——

卷十五の論——

(16) 蜻蛉日記の虚構性としては、道綱母が己の人生を描くとき、夫兼家を現実と異なる必要悪の立場で描いていることを、阿部秋生氏『蜻蛉日記』における身分(人文科学紀要第一三輯)、上村悦子氏『蜻蛉日記の研究』第二章三、木村正中氏『日本文学の争点(中古編)』日記文学の本質と創作心理」で指摘する。『土佐日記』については、注(8)『土佐日記全注釈』で、萩谷氏が詳しく論証している。

(17) 注(15)に同じ。

(18) 「遣新羅使人の慟情——万葉集卷十五遣新羅使歌群をめぐって——」(『明治大学日本文学』第十号)

(19) 注8に同じ。